OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「うえ」と「あがる／あげる」の意味拡張に見る空間認知の類似性
Author(s)	嚴, 馥
Citation	大阪大学言語文化学. 2010, 19, p. 127-139
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77813
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「うえ」と「あがる / あげる」の意味拡張に見る空間認知の類似性*

嚴 馥**

キーワード：上方向の空間表現、意味拡張、空間認知

The purpose of this paper is to identify the spatial cognition of different spatial expressions which are all connected to the same spatial concept in an individual language through analyzing the semantic extensions of *ue* and *agaru/ageru* in Japanese.

Previous researches concerning *ue* and *agaru/ageru* were primarily centered on the description of their meanings. In contrast, my research focused on the aspect of spatial cognition behind two words.

I choose *ue* and *agaru/ageru* as research subject because they are both concerning with upper-direction spatial concept but are quite different on the surface of language. *Ue* is a noun which shows a static location. On the other hand, *agaru/ageru* is a verb which shows a dynamic move. If these two words, which are different on the surface of language, have the same spatial cognition, it can be said that this is one of the common spatial cognition patterns behind the different spatial expressions of upper-direction in Japanese.

Through my research, I first clarified all the semantic extensions of *ue* and *agaru/ageru*. And then, I found that they share the same kind of spatial extension—from the original upper-directional spatial concept, to outer and inner spatial concepts. Therefore, it could be said that the different spatial expressions concerning the same spatial concept might have the same spatial cognition behind them.

1 はじめに

本稿の目的は日本語の上方向に関わる空間表現から、名詞の「うえ」と動詞の「あがる / あげる」を取り上げ、それぞれの意味拡張の考察を通し、同一言語内において、同じ空間概念を表す異なる空間表現の背後に隠れる空間認知について検討することである。

「うえ」と「あがる / あげる」の意味に関する先行研究は、主として意味の記述的な

---

* The Similarity of Spatial Cognition from the Research of Semantic Extension of *ue* and *agaru/ageru* (YEN Fu)

** 大阪大学言語文化研究科博士後期課程修了生

研究である（宮島 1972、森田 1989、柴田他 1976）。本研究ではこれらの研究で分類されている意味を参考にし、語の概念の仕組みという側面に着眼し、ことばの背後に潜む話者の認知を考察する。本稿では、同じ空間概念に関わる異なる空間表現の背後に共通する認知パターンがあるか否かを解明するために、同じ上方向空間概念を表すが、空間関係と文法的特徴・機能が異なる「うえ」と「あがる / あげる」を取り上げて考察する。「うえ」は名詞に分類され、静的な場所・位置の関係[1]を表すのに対し、「あがる / あげる」は自他の区別があるが、同じ動詞のカテゴリーに属し、動的な移動関係を表す。ことばの表面的な現象の差異が大きいため、両語は通常別々に考察される。しかし、その背後の空間認知のパターンに一致する部分があるならば、それは日本語の上方向空間表現の、共通的な空間の認知パターンの１つといえると思われる。そこで、本稿では、名詞の「うえ」と動詞の「あがる / あげる」を同時に取り扱い、それぞれの語彙的ネットワークを解明した上で、同一言語内における異なる空間表現の空間認知の異同について明らかにしていく。

2　先行研究

2. 1　静的な場所・位置の関係を表す「うえ」の意味

「うえ」の意味に関する個別的な研究には宮島(1972)と森田(1989)がある。宮島(1972)は「うえ」の意味項目を「地球の中心から遠ざかる方向」、「足から頭の方へ向ける方向」、「より表面的な方向、ふつう人の目にふれやすい方向」、「身分、値段など価値を表す用法」と４つ立てている。森田（1989）は具体と抽象で「うえ」の意味を大別し、具体的な意味の項目として「方向」と「位置」と「段階」と「連続している言葉の前後」を挙げ、抽象的な意味の項目として「前提」と「方面」を挙げている。

2. 2　動的な移動関係を表す「あがる / あげる」の意味

宮島（1972）は「あがる」と「あげる」の意味を別々に記述している。その内容を表１のようにまとめる[2]。

---

[1]「静的な場所・位置の関係」と「動的な移動関係」という用語は田中（1997）から引用した。
[2] 宮島（1972）は「あがる」と「あげる」について緻密な分類をしているが、本稿では紙面のため主要な意味項目のみを挙げる。

表１「あがる」と「あげる」の意味項目

宮島（1972）「あがる」	宮島（1972）「あげる」
(A) 空間的に上の方へ移動する	(A) 空間的に上へ移動させる
(B) 状態・性質の変化をあらわす	(B) 状態・性質の変化をあらわす
(C) 広い意味では状態変化への抽象化であるが、顕在化という方向に発展したものがある	(C) はっきり目立たせるようにする
(D) 生産	(D) 生産をあらわすもの
(E) ことがおわる	(E) 最後までやりとげる
(F) 目上の人または尊敬する人の家にいく	
(G)「たべる」「のむ」の敬語	(G)「あたえる」の敬語
(H) 油でにた食品ができること	(H) 油でにること
(I) のぼせること	
	(J) 潮がみちてくる

森田（1989）は反義語と類義語と２つの側面から「あがる / あげる」の意味特徴を論じている。「あがる / あげる」の反義語には、「おりる / おろす」と「さがる / さげる」がある。前者に対応する場合の「あがる / あげる」は、「主体自体が全体として移行する行為」、「主体の部分動作」、「ある領域・段階から抜け出る」、「内にこもって隠れて見えない事物・事柄が外側へと発せられる（顕在化する）」と、「あがる / あげる」には４つの意味特徴が見られる。後者に対応する場合は、「あがる / あげる」は「上下の間の段階的な移行」、「主体の部分動作」、「主体は形をなさぬものや抽象的な事柄」、「「上位者側」対「自己（下位者）」間の位置移動」」という４つの意味特徴がある。

また、類義語との比較について森田（1989）は「のぼる」を比較の対象としている。「あがる」と「のぼる」の比較で、「あがる」は「上方へ移行した結果に重点が置かれる」、「全体・部分のいずれの動作にも用いられる」、「他者の力や意志によって動かされる事物にも用いることができる」という意味特徴があることを明らかにした。

柴田他（1976）も「あがる」を類義語の「のぼる」と比較することで、「あがる」の意味特徴を考察している。その結果、「あがる」は「到達点に焦点を合わせる」、「始めの状態（基点）を離れること」、「非連続的移行である。完了を示す」、「上への移動である。その結果、顕在化する」と４つの意味特徴があると指摘している。

同じ上方向の移動動作を表すのに、日本語では自動詞と他動詞の区別で「あがる」と「あげる」という２つの表現が同時に存在する。「あがる」と「あげる」は、主体の移動か主体の力を受けた対象の移動かという点で区別できるが、上方向への移動動作を表すという意味は共通している。表１から分かるように、「あがる」と「あげる」の意味項目には、主体か対象かという視点以外では大きな差異はない[3)]。本稿では意味に焦点をあて

[3)]「あがる」と「あげる」の意味項目の対応について、「あがる」の（F）と（I）、「あげる」の（J）には対応する意味項目がない。また、主要な意味項目は概ね対応するが、その下位項目にも多少のずれがある。

るため、「あがる」と「あげる」は別々に検討することをせず、ワンセットとして扱う。

2. 3　先行研究の問題点

2.1 と 2.2 で挙げた「うえ」と「あがる / あげる」の意味の記述的な研究は認知言語学的に研究する上での基盤を提供してくれる。これらの研究成果を基にし、筆者は語の概念構造の解明によって、言葉の背後に隠れる空間認知を明らかにしたい。そこで、本稿では多義語研究の手法を援用し、同じ上方向の空間概念を表す「うえ」と「あがる / あげる」の意味拡張の考察を通し、その背後に隠れる空間認知の異同を検討する。

3　理論的枠組み－多義語の研究

本稿の研究対象である「うえ」と「あがる / あげる」はいずれも多義語である。認知言語学では、多義語の複数の意味はプロトタイプ的意味から「メタファー」と「メトニミー」という拡張原理に基づいて拡張し、互いに関連づけられるとされている。「メタファー」はイメージ・スキーマの適用領域の変化による認知の操作である。メトニミーの写像は「単一の領域内で起こる」と Lakoff & Turner (1989:102-103) は指摘している[4]。意味の拡張では「イメージ・スキーマ自体が変換されて起こる」(谷口 2003:143) という現象がある。イメージ・スキーマの形の変化は概念領域と関わりないため、「イメージ・スキーマ変換」と呼び、メトニミーと区別して扱う。多義語の複数の意味は最終的に 1 つの語彙的ネットワーク[5] を形成する。

4　「うえ」の意味拡張

4. 1　「うえ」の意味項目

本稿では宮島 (1972) と森田 (1989) を参考に、「うえ」の意味を、意味 1「物体の上部空間」、意味 2「(外側に面した) 表面」、意味 3「高い地位」、意味 4「側面」、意味 5「前提」という 5 つの意味項目にまとめて論を進める。なお、紙面制限のため、空間概念を表す意味 1 と意味 2 を中心に提示する。

次の 7 つの下位項目は「あがる」のみにみられる。①動作の経過に重点②動作の結果に重点③川上の方向への移動である④料理屋などに客としてはいる⑤学校にはいる⑥ねだんが高くなる⑦すごろく、トランプなどでいう「あがる」。一方、次の 6 つの下位項目は「あげる」のみにみられる。①たべものをはく②敵の首をとる③資格の変化④子どもをうむ⑤式をおこなう⑥補助動詞としての用法「～てやる」の敬語。

[4] 本稿では、メタファーとメトニミーの概念領域を中心とした関係性を明確に区別したが、近年の研究ではその間の連続性がしばしば指摘される。例として、Goossens (1995) はメトニミーとメタファーの相互作用について触れている。そのほかに、喚起された属性が単一か複数かが曖昧な場合 (Warren 1999) 及び、概念の分化段階 (Radden 2000) という側面でも両者の連続性が見られる。

[5] 語彙的ネットワークの構造について 4 つの見方があるが、詳しくは Langacker (1988)、Lakoff (1987)、国広 (1994)、田中 (1990) を参照。

4. 2 「うえ」の意味拡張

4. 2. 1　意味1「物体の上部空間」

意味1「物体の上部空間」を「うえ」のプロトタイプ的意味とする。この意味は図1のイメージ・スキーマに示すように、焦点物（黒丸）、背景物（四角ボックス）、位置関係（実線）が含まれる。

(1) 診療所では診察も投薬も無料だ。8畳ほどの診察室はベッドが一つ。机の上に聴診器が一つあった。（朝日新聞2001年12月29日、聞蔵）

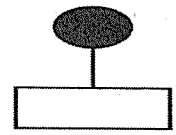


図1 「うえ」の意味1のイメージ・スキーマ

実線で示す位置関係は焦点物と背景物の接触に関しては中立的である。焦点物と背景物が接触する場合は（1）の「うえ」の「上部表面」となる。一方、両者が接触しない場合は（2）の「上方空間」となる。「うえ」のプロトタイプ的意味である「上部空間」には「上部表面」と「上方空間」という2つの下位分類がある。

(2) 飛行機はいつもうちの上を飛ぶから慣れている。（朝日新聞2009年2月14日、聞蔵）

4. 2. 2　意味2「(外側に面した) 表面」

「上部表面」であれ、「上方空間」であれ、背景物の提供する空間は平らな表面かそれに近い表面である。しかし、(3) では「うえ」はプロトタイプ的意味と違い、平らな表面を表さない。

(3) （キャベツの）上のほうはこわいから、二、三枚むいて捨てよう。（森田1989用例）

宮島（1972:252）によれば、(3) の「うえ」は「より表面的な方向、ふつう人の目にふれやすい方向」である。同じ「人の目にふれやすい方向」を表す空間表現として、(4) の「外側」も考えられる。「外側」は裏側と逆に人目にさらされる表面を表す。それに対し、(3) の「うえ」は、宮島（1972）の指摘した意味に加え、「重なり」という意味も読み取ることができる。

(4) 07年2月にガラスの内側に乳白色のフィルムをはり、外側に別のガラスを張ってひびを隠す補修工事をした。（朝日新聞2009年3月3日、聞蔵）

意味2の「うえ」と、プロトタイプ的意味の「うえ」との相違点は、「重なり」の含意にあると考えられる。ここで、認知視点の変化を用いて両者の意味拡張を説明する。話者は物体と物体の位置関係を判断する際に、通常は物体から離れた場所で行う。つま

り話者の認知視点が物体の外部にあるのが普通である。しかし、話者の認知視点を前もって物体の内部に移動させ、物体の内部から外部へという方向で物体と物体の位置関係を判断すると、物体の中心に近い層が、物体の中心から遠い層に包まれると捉えられる。この「重なり」の含みはここから生じる。

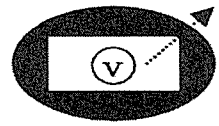


図2 「うえ」の意味2のイメージ・スキーマ

「うえ」は意味1の「上部表面」から意味2の「(外側に面した) 表面」へと拡張する時に、背景物の形は平面 (に近い) 表面から、図2に示すような、内層を包む外層という形に変わる。そのため、意味2の拡張はイメージ・スキーマ変換によると考えられる。また、この拡張によって、焦点物と背景物の間の上の方向性が失われるのと同時に、内部から外部へという認知視線の方向性が生じる。

4. 2. 3　意味3「高い地位」と意味4「側面」

意味3「高い地位」と意味4「側面」はいずれもメタファーに基づく拡張である。「うえ」のプロトタイプ的意味の下位分類の「上部表面」のイメージ・スキーマは空間の概念領域からそれぞれ「地位」と「側面」という抽象的な概念領域にマッピングして生まれた意味である。

(5) 30歳代の主婦は「上の人がすることは分からない」とあきれていた。(朝日新聞 2001年11月22日、聞蔵)

(6) 仕事のうえでは非の打ちどころがない。(森田 1989 用例)

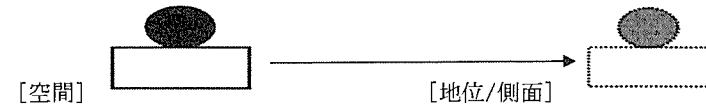


図3 「うえ」の意味3と意味4のイメージ・スキーマ

4. 2. 4　意味5「前提」

意味5は上述の意味と同様にメタファーに基づく拡張であるが、その源はプロトタイプ的意味ではない。(7) の「金持ち」と「家柄がいい」の間には累加の関係がある。「累加」は「重なり」に類似するため、意味5の「うえ」は、意味2のイメージ・スキーマが空間の概念領域から前提という抽象的な概念領域に写像して生じる派生的意味と考えられる。

(7) 彼は金持ちのうえに家柄もいい。(森田 1989 用例)

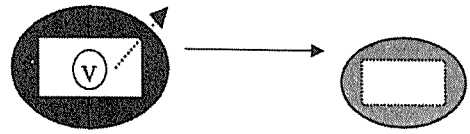


図4 「うえ」の意味5のイメージ・スキーマ

4. 2. 5 「うえ」の語彙的ネットワーク

以上の説明から「うえ」の意味拡張を図示すると、図5のようにまとめられる。プロトタイプ的意味から意味2の拡張はイメージ・スキーマ変換に基づくものであり、実線で表示する。一方、メタファーに基づく他の拡張は太い点線で表す。

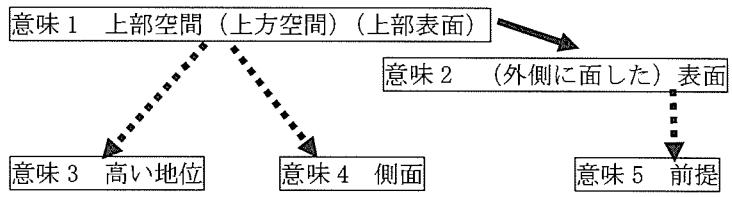


図5 「うえ」の語彙的ネットワーク

5 「あがる / あげる」の意味拡張

5. 1 「あがる / あげる」の意味項目

宮島 (1972) などの先行研究を基にし、「あがる / あげる」の意味項目を、以下の10項目に集約して論を進める。意味1「下方から上方へ移動する（させる)」、意味2「ある空間から抜け出て他の空間に移動する」、意味3「部分的な位置変化」、意味4「敬語表現」、意味5「進学する」、意味6「完了」、意味7「量の増大・質の向上」、意味8「のぼせる」、意味9「上昇と同時に隠れていたものが顕在化する」、意味10「上昇と同時に生じる」。なお、紙面制限のため、以下では具体的な空間概念に関わる意味1、2、9、10、3を中心にこの順で提示する。

5. 2 「あがる / あげる」の意味拡張

5. 2. 1 意味1「下方から上方へ移動する（させる)」

「あがる / あげる」のプロトタイプ的意味は「下方から上方へ移動する（させる)」である[6)]。

---

6) 太田 (2008) は反義語の違いを認定基準とし、「あがる」に2つの別義があると認めている。別義1「物体が対比される上下の領域があって下の領域から上の領域に移動する」は本稿の意味1に、別義2「物体

(8)「…エイッと力をこめて指揮台に上がった最後の姿は一生忘れないでしょう」(朝日新聞 2001 年 12 月 31 日、聞蔵)

(9) 錨を上げたり、下げたりする度に、(宮島 1972 用例。現代仮名遣いに修正を加えた、以下同。)

イメージ・スキーマは図 6 に示すように、移動物（黒丸）と上の方向性（点線）と、移動のプロセス（矢印）が含まれる。

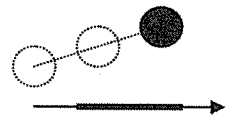


図 6 「あがる / あげる」の意味 1 のイメージ・スキーマ

5. 2. 2 意味 2「ある空間から抜け出て他の空間に移動する」

(10) では「あがる」は蛸が海から陸地へ移動する動作を表す。実際の物理的動作を考えれば、「海から上がる」と、「海の内部から出る」は同じである。したがって、(10) の「あがる」には内部から出るという意味も含まれる。この含みは、移動前後の空間の境界線の出現に由来すると考えられる。

移動前の空間（＝海）と移動後の空間（＝陸地）の空間的性質が非常に異なるため、両者の間の境界線は常に明確に認知される。この移動動作は海の底から海面まで上る動作、いわゆるプロトタイプ的意味と同様に上への方向性を有するが、境界線の前景化によって、意味 2 の「あがる」は、図 7 に示すように、ある空間から抜け出て他の空間に移動する意味も含まれる。したがって、意味 2 の「あがる / あげる」は空間の境界線の前景化による、イメージ・スキーマ変換に基づく拡張である。この意味の拡張によって、上方向の空間概念のみならず、内から外へという内外の空間概念にも関与するようになった。

(10) 明石市ではタコが夜中に海から陸に上がり、スイカを盗むという話が今も漁師の間で伝えられている。(朝日新聞 2008 年 8 月 10、聞蔵)

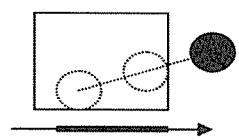


図 7 「あがる / あげる」の意味 2 のイメージ・スキーマ

が基点となる位置から上方に移動する」は本稿の意味 3 に相当する。本稿は反義語との比較を視野に入れないため、意味 1 と意味 3 がイメージ・スキーマ変換に基づいて関連づけられていると考えている。

内外空間概念に関連する身近な例として、(11)「風呂からあがる」が挙げられる。この「あがる」は浴槽の中で座った状態から、立つ状態になる動作を指すが、「風呂からあがった」という意味を満たすのに、浴槽から出る移動動作も不可欠である。容器のような浴槽という空間から離れて風呂場に体を移すことは、ある空間の内部から外部へ出るという移動動作に相当する。したがって、意味2の「あがる」は上方向の空間概念に関連すると同時に、内外の空間概念も絡んでくると考えられる。

(11) 風呂からあがる。(森田 1989 用例)

さらに、(11) の「あがる」は (10) と同様に、浴槽の内部と風呂場の間の境界線の認識によるイメージ・スキーマ変換に基づく拡張と解釈することができる一方で、浴槽の内部で座った状態から立つ状態になるという一部の移動動作を用い、浴槽の内部から外へ出る移動動作を表すのは、メトニミー的な拡張とも考えられる。また、「風呂からあがる」の「あがる」は物理的な動作という側面よりも、それに隣接する動作の完了という側面が優先的に捉えられる。そのため、意味6「完了」に分類することも可能である。

5. 2. 3　意味9「上昇と同時に隠れていたものが顕在化する」

(12) では水死体が自ら浮き上がると解釈することもできるが、警察官の捜査結果で、水死体が引き上げられるとも考えうる。前者は意味2に近く、水中から水面への移動動作として捉えられやすいが、後者は、空間の移動のみならず、探していたものが目の前に現れたという人の気持ちの変化にも関わる。周りの人々の心境の変化は、柴田他 (1976:29) の指摘にある「上へ移動する。その結果、顕在化する」の「顕在化」である。移動主体は物体の内部で上昇し、その内部から外部へ出ていく瞬間に、元々外部にいる人たちの目に入る。移動動作とその結果の顕在化とは時間的に隣接するため、意味9は意味2からのメトニミーに基づく拡張と考えられる。

(12) 友人の朝代の屍体が上ったら悲しさよりも恐怖の方が先立つだろうと思えた。
(宮島 1972 用例)

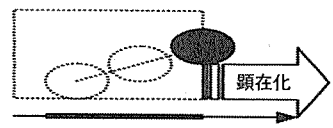


図8　「あがる / あげる」の意味9のイメージ・スキーマ

5. 2. 4　意味10「上昇と同時に生じる」

(13) では「あがる」は火の手の移動動作を表す。火の手が燃え上がっても同じ場所に存在するので、(13) の「あがる」は前の意味項目に述べた移動動作と違い、場所間の移動ではなく、同じ場所での上向きの移動である。

そして、火の手は移動の前には存在しない。空間は「無」の状態であった。移動動作が起こってはじめて火の手が生じ、空間は「有」の状態になる。「無」と「有」は性質が異なるため、両者の間の心理的な境界線が明確である。この点から、意味10は意味2と関係することが分かる。移動動作は移動後の結果である「生じる」と時間的に隣接するため、この意味はメトニミーに基づく拡張である。

一方、「火の手」の量の側面から考えると、火の手があがる前に比べ、火の量が増えたことを示している。したがって、「より多きは上」(Lakoff & Johnson 1980:22) というメタファーにも関わるのではないかと考えられる。

(13) 火の手があがった。(森田 1989 用例)

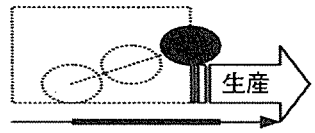


図9 「あがる / あげる」の意味10のイメージ・スキーマ

5. 2. 5 意味3「部分的な位置変化」

「あがる / あげる」の表す移動の中で、(14) に示すように移動物の部分的な位置変化の移動がある。プロトタイプ的意味では移動物の全体の移動を表すが、顔などの体の一部や暖簾など一方が固定された物の場合は、移動が移動物の一部分となる。暖簾を巻くイメージに喩え、意味3のイメージ・スキーマを図10のように規定する。

(14) 木村はふと顔を上げてしげしげ葉子を見た。(宮島 1972 用例)

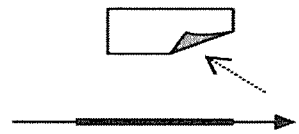


図10 「あがる / あげる」の意味3のイメージ・スキーマ

5. 2. 6 メタファーに基づく「あがる / あげる」の拡張的な意味

ここでは空間の概念領域に関わらない次の4つの意味について述べる。(15)から(18)までは、意味4「敬語表現」と意味5「進学する」と意味7「量の増大・質の向上」と意味8「のぼせる」の例である[7]。これらは全てメタファーに基づく拡張的意味である。

(15) 政は立った次手に花を剪って仏壇へ捧げてください。(宮島 1972 用例)

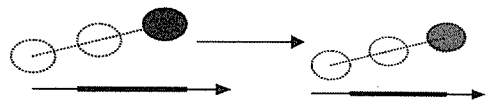
(16) 木下は店から通って、中学から高等学校に上がって行った。(宮島 1972 用例)

[7] 上下のメタファーは増減・良悪・幸 / 不幸等の抽象的な概念まで拡張することについては、Yamanashi (1996) を参照。

(17) 会社は生産があがり、合理化が進む。(宮島 1972 用例)

(18) おひろはあがってしまい、おぶんはおちついていた。(宮島 1972 用例)

「あがる / あげる」のプロトタイプ的意味のイメージ・スキーマが、空間の概念領域から、それぞれ「地位」、「学校・組織」、「数量・品質」、「精神状態」という抽象的な概念領域に写像すれば、上述の 4 つの意味が成り立つ。



「空間」　　「地位/学校・組織/数量・品質/精神状態」

図 11 「あがる / あげる」の意味 4、5、7、8 のイメージ・スキーマ

5. 2. 7 メトニミーに基づく「あがる / あげる」の拡張的な意味

「あがる / あげる」は (19) に示すように「完了」の意味に拡張することがある。この意味は参照点能力 (Langacker 1993:6) の駆動に基づくものである。認知に容易な移動動作を表す空間表現を用い、比較的認知しにくい動作の完了の状態を表す。

(19)「お料理があがるまで、海鼠腸かなんかで一杯めしあがる」(宮島 1972 用例)

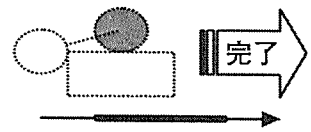


図 12「あがる / あげる」の意味 6 のイメージ・スキーマ

5. 2. 8 「あがる / あげる」の語彙的ネットワーク

以上の説明から「あがる / あげる」の意味拡張を図示すると、図 13 のようにまとめられる。イメージ・スキーマ変換は実線で、メタファー太い点線で表す。意味 2 から意味 9 と意味 10 はメトニミーに基づく拡張であり、図では細い実線で示す。

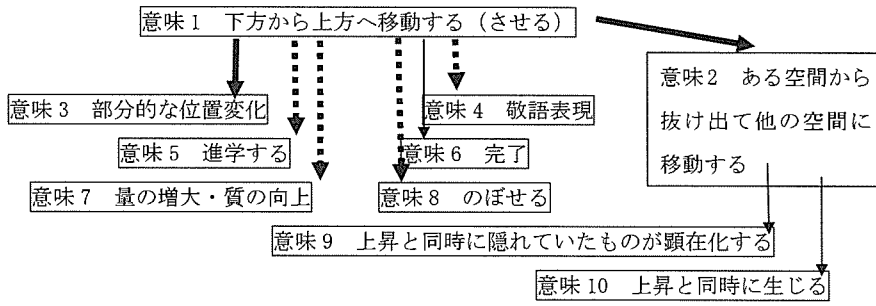


図 13 「あがる / あげる」の語彙的ネットワーク

6 「うえ」と「あがる / あげる」の意味拡張の類似性

第4節と第5節では「うえ」と「あがる / あげる」の意味拡張について検討した。「うえ」と「あがる / あげる」は空間関係も文法的な特徴も異なる。ことばの表面的な部分の差異は大きいが、その背後の認知まで探ると、「うえ」にも「あがる / あげる」にも類似する空間認知が存在することが明らかになった。それは上方向の空間概念を保つと同時に、「内外の空間概念との絡み」が存在するという点である。「うえ」の意味拡張においては、意味1から意味2へ拡張する際に、物体の内部から外部への認知視線という方向性が生じた。一方、「あがる / あげる」の意味拡張においては、意味1から意味2の意味拡張によって、内部から外部への移動動作という方向性が見られた。すなわち、同一言語内においては、同じ空間概念について、空間の認知上に何らかの類似性が存在すると言える。

金子（2004:370）によれば、空間認知には「内外」のような「境界線を持つものとしての空間」及び、「上下」のような「方向性を持つ空間」の2種類がある。金子（2004）はそれぞれの軸の特色に対応した意味拡張を別々に検討しているが、本稿では、日本語においては「方向性を持つ空間」と「境界性をもつものとしての空間」が明確に区切られていない場合もあることが観察された。

日本語においては、上方向に関わる空間表現は数多くあるが、本稿は「うえ」と「あがる / あげる」に限定して考察を行った。今後、他の空間表現を取り上げてその意味拡張の考察を通し、空間認知の類似性を一層明らかにしていきたい。

参考文献

太田真由美「「あがる」と「のぼる」及び「おりる」「さがる」「くだる」「おちる」の意味分析」『日本認知言語学会論文集』8、2008、pp.66-74。

金子倫子「上下・前後・左右－身体の方向性とその意味拡張をめぐる一考察」『日本認知言語学会論文集』4、2004、pp.370-380。

国広哲弥「認知的多義論—現象素の提唱」『言語研究』106、1994、pp.22-44。

柴田武・国広哲弥・長嶋善郎・山田進『ことばの意味　辞書に書いてないこと』平凡社、1976。

田中茂範『認知意味論：英語動詞の多義の構造』三友社出版、1990。

田中茂範・松本曜『空間と移動の表現』中右実（編）、研究社出版、1997。

谷口一美『認知意味論の新展開　メタファーとメトニミー』研究社、2003。

宮島達夫『動詞の意味・用法の記述的研究』国立国語研究所（編）秀英出版、1972。

森田良行『基礎日本語辞典』角川書店、1989。

山梨正明『認知言語学原理』くろしお出版、2000。

Goossens, Louis. 1995. Metaphtonymy: The Interaction of Metaphor and Metonymy in Figurative Expressions for Linguistic Action. *By Owrd of Mouth.* eds., Louis Goossens et al. pp.159-174. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

Lakoff, George. 1987. *Women, Fire and Dangerous Things: What categories reveal about the mind.* Chicago: University of Chicago Press.

Lakoff, George & Johnson, Mark. 1980. *Metaphors we live by.* Chicago; London: University of Chicago Press.〔渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸（訳）『レトリックと人生』大修館書店、1986。〕

Lakoff, George & Turner, Mark. 1989. *More than cool reason: a field guide to poetic metaphor.* Chicago: University of Chicago Press.

Langacker, Ronald W. 1988. A View of Linguistic Semantics. *Topics in Cognitive Linguistics*, ed., Brygida Rudzka-Ostyn, pp. 49-89. Amsterdam: John Benjamins.

Langacker, Ronald W. 1993. Reference-Point Constructions. *Cognitive Linguistics* 4, pp.1-38. Berlin; New York: Mouton de Gruyter.

Radden, Günter. 2000. How Metonymic Are Metaphors? *Metaphor and Metonymy at the Crossroads.* ed., Antonio Barcelona. pp.93-108. Berlin & New York: Mouton de Gruyter.

Warren, Beatrice. 1999. Aspects of Referential Metonymy. *Metonymy in Language and Thought.* eds., Klaus-Uwe Panther and Günter Radden. pp.121-135. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

Yamanashi, Masa-Aki. 1996. Spatial Cognition and Egocentric Distance in Metaphor. *Poetica: an international journal 46.* pp.1-14. Tokyo: Sanseido.